

## 要旨

タイトル：「出す」の意味構造に関する実験的研究：日本語学習辞典の開発のために

本文：

### 1. 研究の目的

本研究は日本語学習者や日本語教師の語彙習得に役立つ日本語学習辞典を開発することを念頭におき、基本語彙であり、かつ多義性の高い「出す」の意味構造がどのようなものであるか、実験的に明らかにしようとするものである。

『大辞林第二版』(三省堂)によると、「出す」には複合動詞の用法を除いても 27 の用法、73 の例文が列挙されている。この『大辞林第二版』の辞書記述では、現代語の使用頻度が考慮され、現代語における一般的な語義から特殊な語義へと記述されている(初版の序)とは言うものの、語義をどのようにまとめ、いくつにするかという点については執筆者の内省に委ねられている面がある。したがって日本語母語話者全体のカテゴリー化を正しく反映していない可能性が残っている。

本研究では、「出す」のプロトタイプ、拡張義、拡張の動機づけなどを実験的に明らかにし、「出す」の意味構造を考察することを目的とする。

### 2. 研究方法

日本語母語話者を被験者に、以下のような実験と分析を行う。

- ① 意味カテゴリー構造の分析：まず日本語母語話者を被験者にして『大辞林第二版』に掲載されている 73 の例文をグループ分け(カテゴリー分け)してもらい、得られたデータをもとに類似性行列を作成し、「非計量的多次元尺度解析」という手法で分析し、不特定多数の一般の日本語母語話者が「出す」の様々な用法をどのようにカテゴリー化し意味構造を構築しているかを実験的に明らかにする。「非計量的多次元尺度解析」は何らかの類似性のデータに基づいて、項目間のつながりを多次元空間内の距離の遠近によって示す手法で、多義語の複雑な意味構造を客観的な数量的尺度によって捉えやすく表示することができる。そのため、語の意味構造を客観的に探り出すのに適しており、今井(1993)や、森山(2008)など、認知言語学的な観点に基づいた多義語研究において最近よく用いられている。
- ② プロトタイプの認定：①で日本語母語話者が分けたグループの中で最もプロトタイプだと思われる用法のグループはどれか、日本語母語話者自身に判断してもらうことで、プロトタイプを認定する。
- ③ 拡張関係の分析：①と②の結果を踏まえ、「出す」の多義がプロトタイプを中心にどのような動機づけによって拡張しているかを明らかにする。非計量的多次元尺度解析はカテゴリー化を行う際の尺度を示してくれるため、拡張の動機づけがどのようなものであるかを推測する手掛かりを与えてくれる。そのためそれを参考にそれぞれの拡張がどのような動機づけでなされたかを考察する)。

- ④ 以上により明らかになった結果を『大辞林第二版』の記述と比較することで、大辞林の意味記述の妥当性を確認すると同時に、日本語学習辞典を編纂する際にどのように「出す」の意味を記述すべきなのか、考察する。

### 3. 結果と考察

分析の結果、『大辞林第二版』と本実験の結果とは、プロトタイプ（中心義）の認定の面においては類似しているものの、カテゴリー化、すなわち語義の分け方にかなりの差異を示していることがわかった。このような結果は、『大辞林第二版』が使用頻度を重視し、最も使われているものから順に語義を配列していることからきている。頻度順の配列は、コーパスの発達と普及の中で、一時期英語辞典などで盛んに用いられたが、プロトタイプの認定には役立つものの、語義間のつながりを見えにくくし、学習者が多義構造全体を把握することを難しくしてしまう。本研究で行ったようなプロトタイプの認定、意味カテゴリー構造の分析、拡張関係の分析を実験的に行うことで、日本語母語話者が持っている「出す」の多義構造を学習者にわかりやすく提示することができ、学習を促進すると期待される。

#### 主要参考文献

- 今井むつみ（1993）「外国語学習者の語彙学習における問題点：意味表象の見地から」『教育心理学研究』41：243-253. 日本教育心理学会.
- 森山新（2008）『認知言語学から見た日本語格助詞の意味構造と習得』